

令和 3 年 5 月 18 日現在

機関番号：34305

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25510023

研究課題名(和文)市町村保健センターによる最早期からの家庭訪問における心理的親子支援モデルの検討

研究課題名(英文) Models of Early Home Visits by Public Health Centers to Support the Mental Health of Infants and Parents

研究代表者

瀬々倉 玉奈 (SESEKURA, TAMANA)

京都女子大学・発達教育学部・准教授

研究者番号：00243353

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：母子保健事業を中心に、不適切な養育の予防的観点から乳幼児期の訪問支援が行われている。そこで、心理職による訪問支援モデルを検討した。日英における視察や聴き取り・対話的インタビュー調査を実施した。調査の結果、家庭訪問支援に心理職は殆ど関わっていなかったが、その必要性は否定されなかった。

また、心理職の家庭支援モデルの典型を提示するよりも、各々の事情に合わせた支援を構築するための参照枠が必要であることが確認された。そこで、本研究では、「援助環境の心理アセスメント」という観点を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では「援助環境の心理アセスメント Psychological assessment of the support environment」という観点を提示した。これは、母子保健領域や子ども子育て支援に限らず、心理職が他(多)職種と協働して支援を行う必要のある様々な場面において、広く活用できる観点である。

また、通常は援助対象の心理アセスメントのみが注目されるが、他職種との協働による支援を行う際には、援助環境と援助対象の心理アセスメントの両者が必要であるとする観点には学問的に新奇性がある。

研究成果の概要(英文)：Home visits, largely provided by Public Health Centers, are a form of preventative care for infants and their parents to avoid mal-treatment. We investigated into supports by clinical psychologists for infants and their parents on home visits. We visited some facilities in Japan and England and conducted interactive interviews with: Japan: public health nurses and clinical psychologists with home-visit experience/knowledge. England: health visitor and a clinical psychologist who had received visiting care as a mother, and some researchers with home-visit experience/knowledge.

While almost none of the experts surveyed had participated in visiting care, they did not deny the need for participant of clinical psychologist. Our findings confirm the need for a foundational, reference framework for home-visit support that can be customized to each municipality. This approach would be more effective than a typical "one-size-fits-all" model for all psychologists.

研究分野：臨床心理学、子ども子育て支援、母子保健

キーワード：心理職 多(異)職種との協働 家庭訪問 援助環境の心理アセスメント

1. 研究開始当初の背景

本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ：少子化、子育て不安の蔓延、子どもへの虐待の増加など、現代の親子をめぐる深刻な状況は、母子保健領域でも顕著である(瀬々倉.2005)。世界的にも高水準とされる日本の母子保健事業の中核、乳幼児健康診査や妊婦健康診査などを未受診の親子が問題となっており、子どもへの虐待のリスクを抱えている率が高いことが大阪産婦人科医会によって明らかにされている。そこには「胎児虐待」という、非常に早期から危機状態にある例が含まれている(光田.2011)。

これらの事態を受けて、厚生労働省は、2001年度に10年間(後に延長)の活動指標として「健やか親子21」を提示し、その中間報告では、「子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減」が新たな課題の1つとして設定された。さらに、2009年から「乳児家庭全戸訪問事業(こんにちは赤ちゃん事業)」や「養育支援訪問事業」などが施行され、主に、助産師、保健師などによる訪問支援が始まっている。

家庭訪問事業は、欧米では古くから行われており、デンマークやノルウェーなど北欧での事業が有名である(西郷.2007)。また、英国では、訓練されたボランティアと有給のコーディネーターによる「ホーム・スタート」が30年前から行われており、2004年度からは、「ホームビジティング」という活動が開始されている。これは、「ドアノッキング」(玄関先での訪問)に留まらず、家庭内に2時間程度滞在し、相談援助や子育て・家事支援などを行う援助である。

米国では、1970年代に小児科医のケンプが児童虐待への対応として家庭保健訪問員の活動を活性化し、1980年代にハワイ州から始まった「ヘルシー・ファミリー」などの事業は、国内だけに留まらず、カナダなど実施地域を拡大しながら続けられている(西郷.2007前掲)。

これら、海外での家庭訪問支援では、**evidence based practice**であることが求められ、訪問者には一定の学歴や資格と共に、研修を受けることが求められている(桐野.2011、西郷.2011)。

ところが、日本における家庭訪問支援については、45.7%の自治体で訪問者に対する研修が全く行われておらず、18.2%の自治体では研修の有無さえ把握していないこと、また、その方法や経験の蓄積がどの職種においてもなされておらず、情報交換もなされていない(西郷.2011前掲)など、大きな課題が明らかとなっている。

西郷の指摘は、母子保健領域に関わる心理職にも共通している。「健やか親子21」開始時の2001年度に、研究代表者が実施した「母子保健領域における心理職の役割に関する全国調査」(瀬々倉.2010)(以下、「2001年度調査」)では、心理職が何らかの形で関わっ

ている保健センターは約半数に過ぎないことから、保健師には心理職の果たしうる役割を理解する機会の無い者が多い一方で、心理職と共に仕事をする過程で、心理職の役割を理解することが示された。また、心理職は、母子保健領域における援助実践を支える具体的な理論の整備が不十分であるため、個人が苦心しながら業務に携わっていた。特に、臨床心理学的な知見を母子保健事業に活用するには相当の応用力を必要とする(Sesekura.2004)ことから、若手で学生時代に臨床心理学を主に学んだ者が、より困難を感じていた。

しかしながら、「養育支援訪問事業」担当者として心理職を雇用している鳥取県Y市保健センターにおいて実施した保健師と心理職へのインタビュー調査結果(瀬々倉.2011)や応募者自身の援助実践経験(瀬々倉.2000)などからは、心理職が保健師やその他の専門職とうまく協働することができれば、最早期子ども・子育て支援が格段に充実・改善される。なかでも、既述した①妊婦健診や乳幼児健診を未受診の親子、②次子の妊娠も含めた周産期の保護者と胎児・乳幼児は、相談機関を訪れることが困難であり、医療以外のサポート機関との関係が一時的に途切れることが多い(瀬々倉.2001)にもかかわらず、心理的なリスクに晒される危険性がある。これら、自ら支援機関を訪れることが困難な親子に対して、心理職が他職種と協働して行う家庭訪問による援助は、危機介入としても有効である(瀬々倉.2000・2001)。

既に1970年代のアメリカでは、ソーシャルワーカーであり、精神分析家でもあったS.フライバーグ(1918-1981)らによって、家庭訪問による「Kitchen psychotherapy(キッチンでのサイコセラピー)」が始められ、早期の親子関係に介入することで虐待の予防が行われており、現在の「乳幼児精神保健学」という国際的かつ学際的な領域の基礎が築かれている。日本の乳幼児精神保健学の分野においても、渡辺や橋本(2001ほか)、永田(2011)などにより注目されている周産期の心理的なケアは最早期の親子支援である。研究代表者は、1990年以來一貫して、母子保健領域、特に地域に根ざした保健センターにおける心理職の役割に関する援助・実践研究を行ってきた。前任校在職時(2000年)には、文部省(当時)内地研究員として東京大学大学院で「地域における乳幼児とその親の心理的援助に関する実践論的研究」をテーマに研鑽を積み、心理職のみで行うオーソドックスな心理カウンセリングや心理療法と、保健センターで保健師や保育士など他職種とのコラボレートによって行う援助の構造的な違いに着目し、「援助環境のアセスメント」という観点を提示している(瀬々倉.2000・2004)。

さらに、2004年には、ベトナムでの国際交流会議において発表し、後に、ベトナム初

の日本の応用心理学を紹介する著書として出版された(Sesekura,2005)。

本研究は、これまでの応募者の援助実践・研究をもとに、地域子育て支援拠点(ひろば型)「あーち」を運営する神戸大学大学院教授の伊藤篤博士(子ども家庭福祉、教育心理学)、ロンドン大学大学院出身で英国をはじめ海外の子育て事情に精通している大阪樟蔭女子大学教授の辻弘美博士(発達心理学)を分担研究者とし、特に母子保健領域における家庭訪問支援の課題について、心理的な側面を中心に検討しようとするものである。

2. 研究の目的

1. 国内の心理職の家庭訪問に積極的な保健センターと消極的な保健センターの実態を把握。
2. 国内における心理職の家庭訪問援助の個別事例を検討。
3. 海外の家庭訪問援助先行例の調査。
4. 保健センターから心理職が他職種と協働で行う、家庭訪問型最早期の親子支援のモデルを検討。

3. 研究の方法

1. 国内の保健センターにおける心理職の家庭訪問型援助の個別事例を臨床心理学的手法による事例研究として精査。
2. 海外の家庭訪問先行例の現状について文献、現地視察、対話的インタビューにより調査。
3. 家庭訪問型の最早期の親子支援について、支援家庭のニーズと家庭訪問事業の現状をもとにモデルパターンを検討。

4. 研究成果

日英において行った視察や聴き取り・対話的インタビュー調査の主な対象者は、以下の通りである。

【国内】保健師・助産師、訪問支援の経験・知識を有する大学教員(心理学)

【英国】3ヶ所のチルドレンズ・センター(英国縦断)の責任者や Health visitor(訪問助産師)、母親の立場で訪問支援を受けた心理職、訪問支援の経験・知識を有する大学教員(福祉学、心理学)

日英における調査の結果、いずれにおいても、心理職による家庭訪問支援は殆ど行われていなかった。その理由として、英国における調査では、以下の4点が挙げられた。

- ① boundary, limit setting, frameworkなどと称される個人心理療法で重要視されている相談構造が訪問支援では確保されにくい点。
- ② 臨床心理士は、問題への対処スピードが遅い点。
- ③ 臨床心理士は、博士号取得者が前提となっており、相談過程としても最後の手段というイメージが強い点。

④ Health visitorなどの家庭訪問支援者は、相当に心理学を学んでおり、多くの場合、心理学的な対応も可能である点。

上記の①、②については、日本においても同様のことが言える。そもそも、日本の保健センターでは、必ずしも心理職が関わっていない。このため、本研究過程で心理職による家庭訪問支援に関する1つのモデルを提示することよりも、個々の自治体の状況に合わせて支援を行う際の参照枠を提示することの方が適切であると考えられた。

そこで、本研究では、家庭訪問事例を精査し、「援助環境の心理アセスメント Psychological assessment of the support environment(瀬々倉,2014)」という観点を提示した。

これまで、母子保健法においては、心理職に関する言及が殆ど認められず、家庭訪問はおろか、その他の役割についても明確化されてこなかった。

一方、日英における実務者との対話的インタビューの中では、心理職が柔軟に貢献しうるのであれば、協働関係は有効に機能すると期待されていることが理解できた。

2018年度には、国家資格である公認心理師試験が開始された。これに伴って心理職も、保健センターの医療・保健スタッフの一員として、新たに位置づけられることとなった。

このような状況下で、心理職が異なる職種のスタッフと協働関係を構築し、自らの専門性を如何に応用していけるかが改めて問われている。その際、研究代表者が、約20年間の乳幼児期における親子支援の過程、実際に経験した家庭訪問事例の研究、国内外における対話的インタビューなどから得た成果、特に、「援助環境の心理アセスメント」という観点は大きい貢献しうるものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

①瀬々倉玉奈(2021)心理職による家庭訪問に関する調査の再検討—英国における対話的インタビュー調査の内容分析—。京都女子大学発達教育学部紀要,第17号

②瀬々倉玉奈(2016)個人心理療法と子ども・子育て支援。臨床心理学(金剛出版)第16巻第1号

③辻弘美(2015)英国の子育て支援政策・事業実践とその評価の現状に関する文献調査。大阪樟蔭女子大学紀要 vol.5

④瀬々倉玉奈(2015)子育て・子育て支援としての大学講義—赤ちゃんとの関わり体験調査—。大阪樟蔭女子大学紀要 vol.5

⑤瀬々倉玉奈(2015)母子保健における臨床心理学的アプローチの応用—子育て・子育て支援と援助環境の心理アセスメント—。神戸大学大学院人間発達環境学研究科,博士学位

論文

⑥瀬々倉玉奈(2013)子育て教室における養育者間スクイグルと託児－親子分離の逆説的効果－. FOUR WINDS 乳幼児精神保健学会誌 6巻

[学会発表] (計 8 件)

① 瀬々倉玉奈 (2018) 乳幼児期の子ども・子育て支援実践と支援者養成－京都女子大学 親子支援ひろば ぴっばらん－. 学まち連携大学促進事業 2017 年度報告会

② 瀬々倉玉奈 (2017) 赤ちゃんとの接触・育児経験に関する調査 日本乳幼児教育学会

③ 瀬々倉玉奈 (2015) 英国における家庭訪問支援に関するインタビュー調査－心理職の関わりを中心に－. FOUR WINDS 乳幼児精神保健学会

④ 瀬々倉玉奈 (2014) 保健センターにおける多職種の協働による親子支援－臨床心理士の立場から－. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科 学術 Weeks2013

⑤ 伊藤篤・寺村ゆかの・瀬々倉玉奈 (2014) Towards Partnership of Early Home-visiting Services by Maternal and Child Health Sector and by Child Welfare Sector in Japan; what is the problem and how can it be resolved?. World Association for Infant Mental Health 14th World Congress

⑥ 瀬々倉玉奈 (2013) 「子どもなんて産みたくなかった」母親と子どもへの保健センターでの支援事例－多職種の協働と母子保健事業のフル活用－. FOUR WINDS 乳幼児精神保健学会第 16 回学術集会

⑦ 瀬々倉玉奈 (2013) 保健センターからの家庭訪問による親子支援と心理職. 日本子育て学会 第 5 回大会

⑧ 寺村ゆかの・瀬々倉玉奈・伊藤篤 (2013) 出産後早期からの親子支援としての家庭訪問に関する研究－兵庫県の実態調査を通して－. 日本子育て学会第 5 回大会

[図書] (計 1 件)

① 「乳幼児の発達臨床心理学：理論と現場をつなぐ」菊野春雄編著 (2016) 阿部直美, 菊野 雄一郎, 倉盛 美穂子, 福井 笑子, 安原 秀和, 池川 正也, 平野 美沙子, 藤田 依久子, 阪上 節子, 隠岐 厚美, 瀬々倉 玉奈, 橋本 祐子, 高城 佳那, 渡辺 俊太郎, (第 8 章 親への支援, 第 1 節 育児不安, 第 3 節 子育て支援, column 7 海外の子育て事情 を担当) 北大路書房, pp-160-165, 172-176. 177

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

○取得状況 (計 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

取得年月日 :

国内外の別 :

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

瀬々倉 玉奈 (SESEKURA, Tamana)

京都女子大学・発達教育学部・准教授

研究者番号 : 0 0 2 4 3 3 5 3

(2) 研究分担者

伊藤 篤 (ITO, Atsushi)

神戸大学・人間発達環境学研究科・教授

研究者番号 : 2 0 2 2 3 1 3 3

辻 弘美 (TSUJI, Hiromi)

大阪樟蔭女子大学・学芸学部・教授

研究者番号 : 8 0 4 1 1 4 5 3

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :

(4) 研究協力者

()